

作品を受け入れたナショナルギャラリーも見事。作品をケアして、活用しながら後世に伝えるという、地道で手間のかかる息の長い仕事を引き受けています。こういう役割を担えるかどうか、美術館の地力の差となって積み重なるのです。彼我の差は大きいようです。(み。)

す。生きていた当時は見向きもされず、その魅力はゴッホの没後に認識されるに至ったのです。同様に、私たちがまだ気づいていない作品の魅力もあるはずですし、それを見出して紹介するのは美術館の重要な役割です。地域に埋もれていた作家の活動を、コレクションとして蓄積しつつ長い時間をかけてでも追跡し、その魅力を見出すことは、地域的美術館の重要な役割だと考えています。人間とは面白いもので、楽しいあるいは美しいものだけに惹かれるのではなく、わざわざ悲しい物語を買って読んだり、入場料を払って悲しい映画を見に行くのも人間です。そうしたもののすべてをひっくるめて、これまでに知られていない作品の魅力を発掘して紹介することは、美術館の基本的な使命なのです。

とはいえ、これまでに体験したことのないタイプのドキドキを紹介しても、わからないことは少なからずあるでしょう。特に難解なものの代表が、抽象美術や現代美術かも知れません。どのように感じていいのかわからないことも多いようです。色や形の美しさであれば、その場で感覚的に印象づけられますが、そうでないものもあります。ヒントをひとつ、私がまだ美術館に勤める前からやっていた鑑賞法です。「何だこりゃ?」と思っても、何が描いてあるか(作られているか)、どのように描いたのか(作られているのか)、そして、作家はなぜその手法・技法を採用したのか、これだけをヒントにみることにしています。美術鑑賞法研究などでは、もっと詳しく厳密に分析されていますが、実際にはこのくらい簡単なワタクシ流で十分だと思っています。さまざまな現代美術作品の並ぶ名古屋市美術館の常設展でも試してみてください。日付だけが表現されている河原温の《"Today" series》を、20年以上前、何も知らないで見たときも、

展覧会の舞台裏

作品の運搬と展示 7

作品の点検が終わると、いよいよ展示に取りかかることになりますが、展示はあらかじめ作成されている展示図面にしたがって行われます。当館の場合実際の展示室を100分の1に縮小した図面があり、そこにどのように壁を立て作品を並べていくのかを書き込んでいきます。事前に机上で作成した図面ですから、実際に作品を置いてみたら予定通りにはいかず、変更に次ぐ変更となる場合も稀にありますが、基本的な展示方針はこの図面によって決定され、大幅に変更されることはまずありません。なぜなら、作品が展示室に搬入される前に、壁面の移動や塗装などといった事前の作業が終了されていなければならず、これらの作業を搬入後に行うことは作品の保全上まず不可能だからです。また壁を動かさずとも、作品そのものをあちらへこちらへと移動することは事故の危険性を高めることに当然つながりますから、これも控えてはなりません。よって、究極の展示図面とは、その図面から1点たりとも変更することなく展示が終了するような図面ということになりますが、残念ながらそんなことは滅多になく、たいていは微調整を少しずつ加えながら展示を完成することになります。

それでは展示図面を作る際、作品の配置を決める際、留意すべき点とは何か？ 学芸員

このプロセスで私なりの理解が得られました。生きていることの意味、時間の経過の中に置かれた自己を見つめることなどなど、勝手に得心し、心にズシリと響きました。

一方、先日まで開催されていたあいちトリエンナーレ2010は、現代美術を中心にした総合芸術祭として企画されました。分かりにくいと思われている現代美術の展覧会としては予想以上の来場者を迎えることができたのは、おそらく、何だこりゃと思ながらも、視覚や聴覚に直接訴えかける作品が多く、人々の関心を引き起こしやすかったからだと思います。メッセージ性の高い作品や、心に深く染みわたるタイプの作品もありましたが、どちらかという、テーマである「都市の祝祭」を現出すべく五感に直接訴えかける作品が多く見受けられました。

ともあれ、心に響く体験をすることは人間にとってたいへん大切だと思っていますし、そうしたものを展示、紹介する美術館の存在する意味もそこにあると思っています。これは美術に関係するワタクシ流の独りよがりな思い込みではないと強がりを書かせていただきます。教育基本法第二条(教育の目標)で、「豊かな情操」を培うことがあげられています。「情操」には広い意味が含まれているでしょうが、学校教育における指導方針の基本を定めた指導要領の中学校学習指導要領の美術の目標に「感性を豊かにし」とはっきりと謳われています。この「感性を豊かに」ということは、他の教科でも重視されつつあり、感動したことを自分の言葉で言い表すことが求められている状況は図工・美術のみならず、国語科でもみられる要素だとのこと。これは、まさに美術館の活動と共通するものでしょう。

動物として、生命体として生きていくために必要なことに加え、美しいものに触れて感動

はどのような視点に立って作品を並べているのか、100点ほどの絵画による個展を例にとって考えてみましょう。個展であり、その画家の業績の全体像を紹介する回顧展であれば、通常は制作年順に作品は並べられます。絵を学び始めた若い頃の作品から、亡くなる直前の作品まで、時系列に並べるによりその画家の作風の変遷や成長の過程を見ることができます。しかし、筆者は一度だけ海外の美術館でまったく逆に、最晩年から初期へと遡っていく回顧展を見た経験があります。途中で順路を間違えたのかと思って展示の最初に戻ったのですが、間違いではなく明らかに意図的に逆に並べているということが分かり、再び順路に沿って見ていったのですが、それはとても不思議な体験でした。普通であれば順を追うごとに作品には新たな要素が加わり、技法は成熟の度合いを増していくものですが、この展示では作品は逆に単純化し、技法は素朴になっていったのです。謂わばルーツ探しの旅をしているような感じで、最後にその画家の原点といえる作品にたどり着いた時、ここから全てが始まったのかと深い感慨にふけたことを記憶しています。そして、その原点が間違いなく最後の作品とつながっていたという事実を、通常の年代順の展示以上にはっきりと意識させられ、こんな方法があるのかと新鮮な驚きを味わいました。以後、通常の年代順の展示の場合でも、最後まで見てから必ずもう一度逆行するという鑑賞方法を試すようにしていますが、最初ほどの新鮮さはないものの、いつも新たな発見があります。一度お試しになってはいかがでしょうか。(F)

愛知大学卒業後上京し、岩波写真文庫のフリーランス・カメラマンとしてそのキャリアを始めました。戦後日本が抱えることになった矛盾や問題を、従来の報道写真とは異なる手法で見せるその表現は、日本の写真の“ヌーヴェル・ヴァーグ(新しい波)”の旗手として一躍注目を浴びることになります。

「被爆」の精神的葛藤を追及し、写真家のライフ・ワークともなった(長崎)シリーズ(1961～)。占領と独自性が屹立する沖縄の精神性を注視した『太陽の鉛筆』(1975)など沖縄に取材した一連の作品等、それらは現在でも継続して撮影されています。そうした東松の写真表現は海外でも高く評価され、2004年には『Skin of the Nation』と題した大回顧展が

し、古典を読んで時空を越えて共感すること、これが人間として生きていく証なのかも知れません。その場は、美術館だけではなく、博物館ではいにしえの人の知恵や工夫とその姿勢に学び、科学館では自然や宇宙のロマンにひたるのも同じことでしょう。そこでは、こうした豊かな心を養うべく、一定のシナリオのもとに、モノが提供されているのです。

美術館は広義の「博物館」に含まれます。いわゆる「博物館」は、歴史博物館、美術館、科学館、動物園、植物園、水族館、史料館など、多岐にわたった分野の施設を含んでいます。諸種の「博物館」を包括して規定している博物館法の第1条(この法律の目的)に「この法律は、社会教育法の精神に基き」とあり、また、第3章では公立博物館について規定しており、第19条でその所管を教育委員会としています。博物館施設は社会教育施設であり、教育のための施設と宣言されているのです。

現実には、教育委員会の所管ではない「博物館」も多くあります。それぞれに理由があつてのことでしょうが、教育的配慮を放棄した運営をしているところはどこにもないはずで、楽しんでもらうだけではなく、教育的効果が期待されているのです。大の大人に教育というと押しつけめいた印象がするならば、

感想ノートから

あいちトリエンナーレ2010 都市の祝祭

2010年 8 月21日(土)～10月31日(日)

今年の夏に開催されたあいちトリエンナーレでは、名古屋市美術館もメイン会場のひとつとなりました。各会場の展示内容は、それぞれの会場ごとの個性を活かそうと考えたもので、街という社会的要素が含まれる中で展開した長者町地区や、建物の構造上の理由から映像作品を中心にした納屋橋会場と両美術館内での展示は意識して対照的なものとなるようにしました。街なかでは、街という要素や街の人々とのコラボレーションということも重要であるのに対し、美術館は、もともと美術作品を見せる場所として作られていますから、他の要素が入らない分、「美術作品そのもの」の存在が浮き彫りになります。そのようなことを考慮に入れた上で、巨大な空間を持った愛知県美術館では、現代美術を「魅せる」ことを意識し、規模としてはこぢんまりとしつつも、黒川記章による個性の強い空間を持った名古屋市美術館では「経験する」ことをより強く打ち出した展示構成にしました。トリエンナーレの成功と相俟って、当館での展示もおおむね好評だったようです。「いつもの美術館より気楽に見ることができました。」「トリエンナーレを見に来たケド、常設展示が非常におもしろい。」「トリエンナーレの会場の中で一番好きかも!」「市美に入ったらお香のかおりがして、不思議に思ったのですが、作品でしたか。ようこそと歓迎された気分になりました。」あるいは、「この美術館の全部の作品がまるで生きているようでした。」など、視覚のみならず、嗅覚など五感を使って感じるものや、実際に動きのある作品も多かったためか、作品を体感するという点についての感想が多くありました。

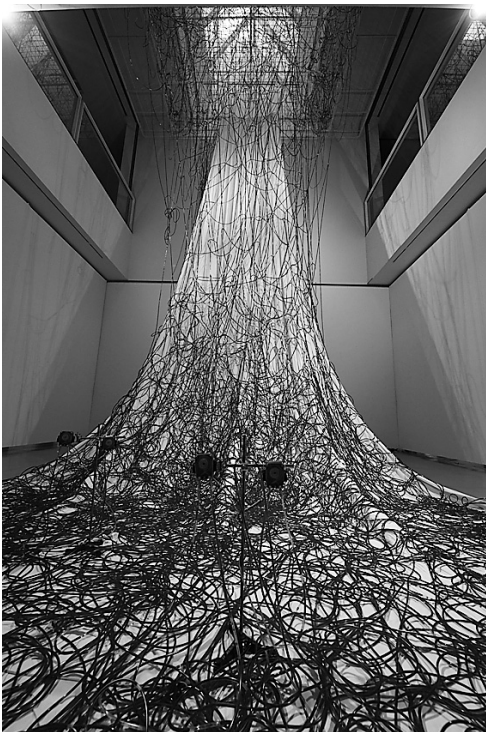
中には、『《Erotic Space II》にはエロティックな要素は一切なく、ひどく憂鬱で寒々としていて、ぞっとするぐらいの悲しみが

学習と言いかえればよいでしょうか。学習の場なのです。15年ほど前からでしょうか、「博物館はテーマパークだ」とか「博物館でエンターテイメント」などと言われることがありました。それは、かしこまった活動や、専門的に過ぎる活動の目立った「博物館」に、楽しさの要素を取り込み、たのしみながら学ぶことを提唱したかったに他なりません。

このことは、今でも私に重くのしかかっています。美術館で提供されるたのしみは、軽薄な上っ面の楽しみではありません。精神の愉悦なのです。それを可能な限り多くの人に伝えるべく、展示の方法に工夫をしたり、広報宣伝を変えてみたりと、さまざまな配慮をめぐらすのです。効果は一朝一夕には出ないのが苦しいところです。ともあれそうした手法としてエンターテイメント的要素などが提案されたわけですが、楽しければいいというものではないはずで、このことを忘れるわけにはいきません。

なぜ豊かな情操が必要なんだろう。なぜ豊かな感性を育てるんだろう。人間に必要なからなのです。教育は人間として生きる力をはぐくむことであり、芸術などに心を動かすことも、めぐりめぐって生きる力につながると信じています。(hnhk)

あった。まるで、人生の最後に病院で介護されてベッドの上でひどい悪夢を見ているかのようだった。でも、この作品が全体の中で一番考えさせる作品だった。(原文英語翻訳筆者)」や、「死にたいと思っている私が、《不在との対話》を見て、生きているのは素晴らしいことだと見ている時だけ思った。ずっと《不在との対話》がここにあれば時々見ては生きていけるのに。」といった、生と死ー私たちが見たり考えたりする以前にここに存在するかどうかーという根源的な問題についてのコメントがありました。私たちは、それぞれに悩み、苦しみ、希望や楽しみを持って生きていて、時に、作品に表現されている作家の感動と私たちの心の何かが共振することがあります。「生きているのは素晴らしい」と一度でも感じれば、人間は無意識においてその感情を忘れることができないと私は信じます。「トリエンナーレまた3年後も待っています」ぜひ、また見に来てください。(hina)



塩田千春《不在との対話》
photo : Sunhi Mang ©Chiharu Shiota

ニューヨーク、ワシントンD.C.、サンフランシスコで開催され、大きな反響を呼びました。2000年代に入ると、写真家はかつて取材・生活・撮影した都市の写真群を集大成し、その成果は長崎、沖縄、京都、愛知、東京の各地の美術館で、「マンドラ」と題して展示されました。町並みや人々の暮らし、土地の記憶や今日の姿が、モノクロ・プリント、カラー写真、さらにはインクジェット・プリントで焼き付けられ、並置・混在されたその展示には、時間を越えたイメージの集積を見せようとした作家の新たな試みにも思われました。今回の展覧会は、60年に及ぶ東松照明の表現の集大成を見せる本格的な回顧展を目指しながらも、その「全仕事」をどのように紹介する

かが、非常に重要な課題になってきます。全仕事を通して何が見えてくるのか。戦後日本の歴史的肖像か、或いは日本人の精神的「原風景」なのか。ご期待下さい。(J.T.)



東松照明《波照間島》1971 (昭和46) 年

展覧会 現在進行形

写真家・東松照明 全仕事

2011 (平成23) 年 4 月23日(土)～ 6 月12日(日)

東松照明(1930ー)は、戦後の日本を代表する写真家というに留まらず、その表現は写真というメディアの記録性を活かしながら、敗戦からのわれわれ日本人の精神の在り処とも呼ぶべきものをその深奥から浮かび上がらせて見せます。

1930 (昭和5) 年に名古屋市東区新出来町に生まれた東松は、20歳の時に写真に出会い、

どこがおもしろい?!

今回の「どこがおもしろい?」は、ディエゴ・リベラ(1886-1957)による《スペイン風景(トレド)》(1913年)に寄せられた皆さんからのコメントを紹介します。

「山の中のふうけいがうかんできているようで、おもしろいです。どこもいろがちがうので、おもしろいです。おくの山みたいなやつが、はしなのか山なのか、わからなくておもしろいです。」(いーいーさん、8歳)

「遠くの方にはぎやかでおだやかで、近くの方はとげがあって、より攻撃的な感じがします。」(ほんまこさん、23歳)

「好きな絵です。風景をキュビズムで描くのは珍しいのでは?手前の丘や山が斬新ですが、遠くに家や木、畑がかわいらしくあり、なんだかホッとします。」(Takayoさん、52歳)

「色数ハンパねえって最初に思いました。手前は溪谷で、真ん中に小川が流れているように感じます。奥の暖色系の部分は畑に見えます。最も奥はけわしい山に思えます。」(匿名、?歳)

「この作品のぬり絵があったらたのしそうです。いろいろな風景ができそうで、そんな展示をみてみたい。」(すずきさん、?歳)

「色合いがとても美しいです。スカーフやタペストリーなど布の柄になったら素敵だと思います。派手すぎず、地味すぎず、良いですね。」(パーボスさん、43歳)



ディエゴ・リベラ《スペイン風景(トレド)》(1913年)

「真ん中にいる人が気になる…人なのか、岩なのか…?左下のぐるぐるがわらびに見えるけど海外にわらびはあるのだろうか?」(おくむらさん、18歳)

「おくむらさんの感想の『真ん中にいる人が気になる…』に『人なんていたっけ?』ともう一度見てみたら、確かに人がいるように見えて驚きました。そうして見えたことによって左側にもピンクの衣装をまとった女の人が腰かけているようにも見えてきました。暗い色も明るい色も淡いトーンで、見てて落ち着きます。だけれどもカチャカチャとした形が沢山あって、野山を見に出かけたくなるような絵です。」(さるさん、22歳)

「トレドを中心に描くのではなく、あえて端に寄せることでうまくスペインを表わした絵になっていると感じました(オリーブ畑?など)。」(tonny3さん、23歳)

「光と奥行き、堅固となだらかの対比。近くで観た時は、各ピースに特別印象はなかったが、遠くから全体を観た瞬間自然と、はっきりと風景が浮かんた。影を描いているわけでもないのに、光の感じというか、陽の注がれ方が分かるのが不思議。」(匿名、24歳)

「家を出た少年が自分の家が最後に見えるところで振り返った情景のような感じ。故郷の

温かさ、これからの厳しさをあらわしているように見えました。」(たまんちゅさん、20歳)

《スペイン風景(トレド)》はタイトルの通り、スペイン中央部に位置する古都トレドを描いた作品です。この街は中心部を流れるタホ川によって、大聖堂を中心に城塞やレンガ造りの家々が並ぶ旧市街と自然が豊かな地域とに二分され、作品の中でも川を挟んで二つの対照的な風景が描かれています。キュビズムの理論に基づきつつも風景画としても成立している作品は、伝統的なヨーロッパ絵画を真摯に学ぶことで磨かれた豊かな色彩感覚と構成力を持つ、この画家ならではのものです。当時リベラはトレドの街に魅かれ、友人とともに何度か滞在しては17世紀の画家エル・グレコを熱心に研究しており、構図を参考にしたと思われる作品が残っています。

リベラはメキシコの美術学校を優秀な成績で卒業した後、1907年から約15年間をヨーロッパで過ごしました。当時、芸術を志す若者はこぞってパリを目指しましたが、彼はスペインのマドリードで留学生生活をスタートさせています。渡欧後の数年間は伝統的なヨーロッパ文化を尊ぶ保守的な価値観に基づいた作品を制作していましたが、1913年故国メキシコで内戦が起こるなどの社会的な変動によってそれまで信じてきた価値観が大きく揺さぶられると、リベラは画家としての新境地を開拓すべく実験的な前衛美術の世界、特にキュビズムに傾倒し、その独自性を開花させていきました。

ところが、メキシコに戻った後の作品にその影響を見ることはできません。これはキュビズムのような一部の限られた知識階級を楽しませるための芸術思想と、帰国後のリベラが取り組んだ活動における「民衆のために芸術は何が出来るか」という考えとが相容れなかったから、と考えられています。(3)

美術館Q&A

「展示室の隅に座っている人は、何をしているの?」

学芸員という仕事は、一般的には馴染みがないでしょう。「学芸員です」と話すと、よく「美術館で絵のそばに座っている人ですね」と言われます。実際はそうではなくて、学芸員は展示室の裏の事務室で、次の展覧会の計画を立てていたり、イベントの準備をしていたり、何がしかの原稿を書いていたります。言ってみれば「仕込み」の仕事が大半なので、展覧会の会場で学芸員の姿を見ることはあまりありません。「展示室の隅に座っている人」は、展示されている作品の安全と、会場内の

良好な鑑賞環境を保つための監視をしています。監視員は、作品に触れないよう、また撮影や携帯電話の通話がないよう来館者に注意をうながしたりします。

美術品は見られてこそ意味を持ちますが、安全な収蔵庫から出されれば、必ず損傷・劣化・盗難のリスクを負います。今年の1月には、メトロポリタン美術館に展示していたピカソの絵画(当時約117億円相当)に、来館者が誤って倒れかかり、画面が損傷したというニュースがありました。やむをえない場合もありますが、文化財の保護も美術館の重要な任務ですので、人災や虫害などを抑止するためには、展示室内の必要な箇所に監視員を配置しておくことが大切です。「作品に触れないでください」と呼び止められて、気分を損ねた経験がある方もいらっしゃると思いますが、美術品は一般的に想像されるよりずっと

貴重で繊細ですので、どうかご容赦いただければと思います。

「話しかけてもいいの?展示について質問してもいいの?」

監視員は来館者からよく質問を受けます。「常設展は展示替えますか?」「美術館には全部で何点の作品がありますか?」という質問が多いそうです。(常設展は年3～6回の展示替え、作品総数は4358点です)。作品の特徴や技法については、展示替えごとの研修や自己学習で勉強していますので、その場でわかることでしたらお答えできます。込み入った質問であれば学芸員が取り次ぎ、調査して返答しています。

現役監視員の方に聞いてみたところ、この仕事はとても気に入っているとのこと。「スタッフは全員美術が好きで、快適な環境で作

品に囲まれて過ごせるのが良い」のだそうです。また「美術好きのお客様から感想をいただくのも楽しく、研修などで美術の知識が得られるのも魅力」だそうです。逆に、「混雑時はかなり神経を使い、一日中立ちっぱなしなので辛い」ということです。また、「解釈の難しい現代美術について、お客様から感想を求められることがあり、それは困ってしまう」そうです。

ちなみに当館の場合、常設展の監視員は人材派遣会社に依頼して来ていただいている方々です。欠員があった場合には、契約会社より求人情報が出ますので、美術館で働いてみたい!という方は、「美術館 求人」などのワードでネット検索してみると、時おり募集が見つかると思います。(nori)

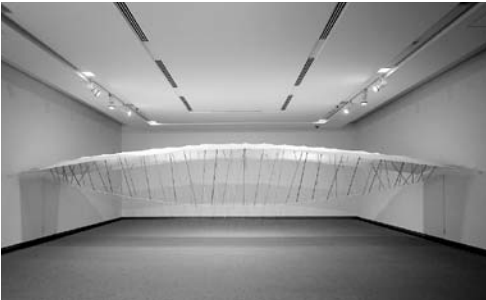
*ご質問いただいたMさんには特別展のペアチケットをお送りします。

郷土の作家たち

庄司 達(しょうじ さとる／1939ー)

庄司達は1939年、京都市に生まれ、生後まもなく名古屋に転居した。両親は華道と茶道の教師をしており、大学卒業後、家業を継ぐという条件のもと、京都市立美術大学(現在の京都市立芸術大学)美術学部彫刻科へ進学する。この時期の試行錯誤を通じて空間への関心と問いが芽生え、三次元のボリュームある彫刻への志向は遠のいていった。卒業後、名古屋に戻って名古屋市立工芸高校のデザイン科で教え始めるが、そこで、後の作家活動を決定付けるような出会いを果たす。それは、「布」との出会いだった。その時のことを、庄司は次のように語る。「ある日、校内の文房具店の店先に積み重ねられているハンカチに目が引き付けられてしまった。生徒がその一枚を指でつまんでひらっとさせて買って行く光景に非常な新鮮さを感じたのだ。積み重なってボリュームとなった、布の束の最上部の一枚が飛び上って空間の中に駆け込んで行くかのように思えた。私は興奮した。授業が終るのももどかしく、何十枚ものハンカチを手に入れて研究室に閉じこもった。」(浮かぶ

布ー庄司達展[柔・空間の散歩]〈新潟市美術館〉カタログより)1968年には、桜画廊(名古屋)において個展を開催し、彼の初めての布によるシリーズ《白い布による空間》を発表した。1970年代にはコンセプチュアルな方向への関心から新聞紙や絵葉書を使用した作品も発表しているが、1970年代後半からは再び布による作品に立ち返っている。1985年頃より始められた《Navigation》シリーズでは、布、木の棒、ロープなどを用いて展示室の中に伸びやかな空間を創り出し、布の特質を生かしたスケールの大きな造型が実現された。庄司は布を「宇宙と地球と私の力関係を自己表現として見せてくれる」格好の素材と考えており、現在に至るまで、布による豊かな空間の表現を探索し続けている。2010年には、碧南市藤井達吉現代美術館(愛知)にて、個展が開催された。(akko)



庄司達《Navigation Flight(空間の誘導・飛行)No.5ー6) 1991年

渡辺 英司(わたなべ えいじ／1961ー)

図鑑の蝶が本の中から解き放たれ、床、天井、壁にとまっている。蝶が図鑑から飛び立つという超現実主義的なイメージは、詩的でロマンチックでいて、2次元から3次元に展開することで、よりリアリティのあるものとして見ているわれわれを中に取り込みながら現前してくる。その美しいイメージが織りなす世界は、あまりに洗練された美しさでもって、渡辺の作品がコンセプトとユーモアが中心にあることを忘れさせてしまいそうだ。渡辺自身、植物図鑑のモチーフから始めたこのシリーズを「蝶」でやるためには時間が必要だったと言う。彼自身、そもそも虫があまり好きでないということもあったようだが、やはり蝶がもたらすイメージと取り組むには、心の準備が必要だったのではないか。しかし、このシリーズの作品は、そのようなロマンチックなイメージとは別の次元で、名付けることで世界の中に存在を与えるという「言葉」の機能を思い起こさせる。名付けられ、分類されることで、存在が視覚化する。記号学者のロラン・バルトは「絵画は言語活動か」と問うたが、まるでその問いに答えるかのように、スコットランドの作家トーマス&ローリー・クラークの蝶の分類名の文字のインスタレーションをコラボレーションする。蝶のモチー

フは、1992年から、このシリーズに展開されるようになった。「蝶による鳥瞰図」と作家本人が話るように、彼の作品はユーモアが常に発想の根本にある。あいちトリエンナーレでは、ビル1棟を使い、渡辺の芸術の神髄を思う存分見せつけた。人工芝に人工の芝を生やし、緊急救助のためのようでもあるが、ヘリコプターを止めることがないヘリポートなど、ものの概念や日常感覚をほんの少しずらすことでもたらされる独特の世界で、ユーモアとともに見る者を知的な遊戯に誘い出す。1961年愛知県生まれ。この地方の若い作家や海外の作家を招聘し、名古屋で発表の機会を与える活動も精力的に行っている。名古屋美術館協会の2011年のカレンダーを制作。(hina)



《蝶瞰図(蝶の名前／名前の蝶)コラボレーションワーク》あいちトリエンナーレ ©Eiji Watanabe photo:Tetsuo Ito

展評

2010年11月2日(火)～30日(火)
白土舎常設展示

「現代美術のメッカ」の終末……?!

白土舎が閉廊するという通知を受けて、さっそく訪ねた最後の展覧会には、この画廊に縁の深い作家12名(岩城直美、坂本夏子、設楽知昭、鋤柄ふくみ、鷺見鷹、高橋信行、奈良美智、生川晴子、藤城凡子、松井紫朗、森北伸、チャールズ・ウォーゼン)の作品が展示されていた。画廊主(土崎正彦さん)のお眼鏡に合った数少ない作家たちの作品は、「いつまでも壁に掛っていたい」と静かに語っていた。

いまから20年程前、名古屋市美術館が開館した頃、名古屋には数多くの現代美術の画廊があって、「現代美術のメッカ」と呼ばれていた。とくに伏見界隈(名古屋市中区錦)には有力な画廊が集っていた。『桜のおばちゃん』の人柄で愛された桜画廊、現代美術家・荒川修作を全面的にバック・アップしていたギャラリーたかぎ、アメリカ現代美術の本流を紹介していたアキライケダ・ギャラリー、イギリス現代美術の新鋭作家たちの発表の場であったコオジオグラ・ギャラリー、名古屋の若手作家を積極的に取りあげたラヴコレクション・ギャラ

CULTURE, MOVIE, DRAMA, MUSIC & BOOK

『誰も知らない印象派 娼婦の美術史』
山田登世子著、左右社、2010年



ルノワール《船遊びの昼食》
フィリップス・コレクション(ワシントン)蔵

本の帯紙(別名「腰巻」)に赤い文字で、でかかで「驚愕!」の二文字が踊っていますが、確かに題名からして挑発的な本です。印象派ほどポピュラーで、研究者がごまんというテーマについて、「誰も知らない印象派」について教えてあげましょう、と宣言するのは相当な度胸と自信が必要です。そこに「娼婦の美術史」と続くわけですから、読者の興味を煽る戦略としては満点です。なにかしら後ろ暗いような興味に引かれつつ、あたりを伺いながらそっと本を手に取り、ページを繰っていくと、なるほど通常の印象派本ではお目にかかれないような情報が満載されています。多少印象派をかじっている評者としては、「驚愕!」とまではいきませんでした。が、読み進めるうちに「ほぉー」と声を漏ら

イベントレビュー

「ファイナルシンポジウム
みんなで話そうあいちトリエンナーレ!」
2010年10月29日(金)18時～

あいちトリエンナーレの閉幕直前、トリエンナーレについて振り返りつつ様々な人が気軽に話せる場をつくろうと、あえてパネリストを固定せず、キュレーター、事務局、ボランティア、サポーターズクラブや長者町の人々さらには報道関係者から、会場内の参加者の方にパネリストになって頂き、カジュアルに開催しました。酷暑の中開幕したトリエンナーレは、肌寒い空気を感じられた10月下旬には、当初の目標をはるかに超えた50万人以上の観客数を数えることとなりました。(最終的には57万人)実際に、長者町での経済効果、あるいは、はじめて美術館に訪れてくださったお客様が急激に増えるなど、トリエンナーレが及ぼした影響は様々な局面で見られました。会場では、その効果について積極的に評価する声、例えば、「現代芸術に目覚めた」、「芸術を通じて国際交流をした」、「街の人の意識が変わった」等々が挙げられたと同時に、一方では、ボランティアのシステムやイベントについての運営面での問題点

り、そして1992年に新しく開廊した白土舎。東京をはじめ全国各地から名古屋市美術館を訪れた学芸員たちは、ほとんど例外なく、仕事帰りに伏見界隈の画廊を訪ね歩いていました。まだ駆け出しの学芸員だった私も、新聞や雑誌の「展評」の取材のために、しばしば「画廊まわり」をしたものだった。すでに世界的に活躍していた作家たち(荒川修作、河原温、桑山忠明など)の新作を見に行ったり、新鋭作家たち(吉本作次、宮島達男、奈良美智など)のデビュー作に出会ったりしたこともあった。しかし、伏見界隈の画廊が次々と閉廊、移転して、残されていた白土舎が閉廊したいま、まさに「現代美術のメッカ」の終末を感じざるを得ない。新しい美術の創造を現場で支えている画廊の存在は、美術館とともに、その都市の芸術・文化のレベルを反映しているが、名古屋が再び「文化不毛の地」と呼ばれないように、私たちに何ができるのだろうか。(sy)



したことは一度や二度ではありません。例えばルノワールの有名な『舟遊びの昼食』について触れた次の箇所。「ところで、クイズではないけれど、この名画について、こうたずねられたら、読者は何と答えるだろうか。一この絵の中に『娼婦』が何人いるでしょう? あくまで筆者の推測だが、描かれた女たちは全員あやしいと言わねばならない」。驚きますよね。ルノワールの代表作であり、パリ近郊ののどかな休日の一時を描いた、この幸せ一杯の名画に登場する女性たちがすべて娼婦と言われたら、明るい喜びに満ちた画面の中に、急に生臭い風が吹き始めるような気がしてきます。美術の教科書にも載っているのに、小学生になて説明したらいいんだろう、なんて余計な心配までしてしまいます。著者によれば、『舟遊びの昼食』の舞台になっているシャトゥをはじめ、ラ・グルヌイエールやブーヅヴァルなど、印象派が好んで描いたパリ近郊のセーヌ河畔の行楽地は、いづこも娼婦と彼女たちを目当てにやって来るいかがわしい男たちであふれる「歓楽の水辺」ということらしいのです。しかし、印象派の絵からは、そういった生臭い現実はいさっぱり取り除かれ、喜びと輝きに満ちた人生だけが謳歌されるのですが、だからこそ彼らの絵を支持した中産階級の居間を飾ることになったのだ、という分析もしっかり行われています。なるほどね。しかし、この本を読むと、パリの町中も近郊も当時は娼婦で溢れかえっていたようですが、となると堅気のご婦人方は一体どうしていたのでしょうか? 次回の著書で是非そのあたりを教えてください。登世子先生!(F)

などもあげられました。名古屋という街でトリエンナーレを通じて何かがほんの少し動いたということは事実だと思います。また、3年ごとに続いていくことでその動きが名古屋という街の魅力を形作る一つのダイナミズムに発展する可能性もあります。運営面での問題点については、回数を重ね経験を通じて解決していけると思います。しかし、私は、定期的に国際展を開催することを決定してしまった(たとえそれが行政的な決定でなされたとしても)この街とそこに住む人々の責任についてもっと議論する必要があるのではないかと感じました。つまり、この街に生きる人間として、ありきたりの情操的なとらえ方に留まらずに芸術という存在を見つめ、国際展や美術館の矛盾に満ちた存在について、それをとりまく社会の状況について考え続けることです。とにもかくにも、この一過性の出来事を3年ごとに続けていくという責任を負ってしまった私たちは、それについて始めたばかりなのです。(hina)



展評

国際展の時代(?)に生きる私たち、そして美術館

今年は、名古屋ではじまったあいちトリエンナーレはじめ、瀬戸内国際芸術祭、釜山、光州、ソウル、上海、台北等々で、たくさんの国際展がアジアで開催されており、私自身は、お財布と時間の事情から、瀬戸内と韓国との3つの国際展を駆け足で巡りました。

近年の世界的ポリティックスのイデオロギーともいえる「グローバリゼーション」を背景に、特にアジアを中心に、各地に国際展が設立されています。国際展が乱立する中で、あいちの発信力がいかほどになりうるのかという観点から、なぜここで、どのようにやるのかということについての議論は、今回の成功に拘わらず、引き続きなされるべきでしょう。しかしながら、建昌哲監督によって掲げられた「都市と祝祭」といった概観的なコンセプトは、最初は批判を受けたものの、その意図されたゆるさによって芸術の多様な存在を包括することができ、それを通じてほんの少し露わとなった名古屋という都市が持ちえていなかった、多様性への許容へと近づく一歩になり得たと、私は感じました。あいちに出品したホアン・スー・チエ(黄世傑)は、釜山と光州でも展示をしていました。日用品を美しい機械仕掛けのインスタレーションに展開させる彼の作品は、名古屋では、アジア的な祝祭性を見せましたが、「Living in Evolution (進化の中に生きている)」と題された釜山ビ

イベントガイド

■特別展 ポーラ美術館コレクション展
ー印象派とエコール・ド・パリ

箱根にあり国内有数の内容を誇るポーラ美術館コレクションの、中でもとりわけ評価が高い、モネ、ルノワール、セザンヌ、ゴッホ、スーラなど印象派から36点と、ピカソ、モディリアーニ、シャガール、スーティン、フジタなどエコール・ド・パリから38点の、合計25作家74点の名品を、厳選してお楽しみいただきます。

会期：2010年12月7日(火)～2011年2月6日(日)
会場：第1・2企画展示室
料金：一 般1,300円(1,100円)
高生 900円(700円)
小生 600円(400円)

※()内は20名以上の団体

【関連催事】

○解説会

日時：1月29日(土)午後2時～
講師：角田美奈子(名古屋市美術館学芸員)
※2階講堂、無料、定員180名(約2時間)

○ギャラリートーク

当館ボランティアと、楽しく観覧します。
日時：[1月]7・12・13・14・16・18・19・20・21・25・26・27・28日
午前10時30分～／午後1時30分～
※展覧会入場券で参加できます。(約1時間)

■特別展 没後120年 ゴッホ展

会期：2011年2月22日(火)～4月10日(日)
※従来の金曜に加えて土曜も夜間開館します。
会場：第1・2企画展示室
料金：一 般1,500円(1,300円)
高生1,000円(800円)
小生 600円(400円)

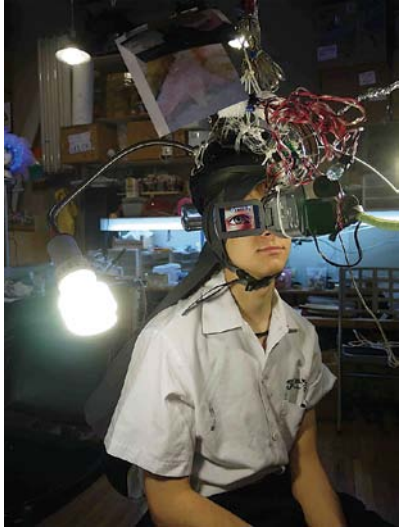
※()内は20名以上の団体

【関連催事】

○講演会

日時：3月6日(日)午後2時～
講師：神谷浩(名古屋市美術館副館長、国際浮世絵学会理事)

エンナーレでは、作品のインヴェンショナルな側面が強調されました。芸術監督が掲げる展覧会のコンセプトは、作品の多様な見え方を提供するだけでなく、実際にはそれぞれの地の国際展の個性も反映されていきます。韓国の民主化運動の聖地と言われる場所で開催される光州ビエンナーレが、展覧会にどのようなコンセプトを掲げようとも場所の持つ社会性と無関係でいられないように。つまり、芸術祭の特色付けには、芸術監督のコンセプトとともに、その地の人々が芸術祭とどう向き合うかということも重要なのです。そして、この地ではじまった国際展をわれわれが大切にするには、それと補完的関係にある美術館の活動やその他のオルタナティブな活動をも大切にしていくことにつながっていくのではないのでしょうか。(hina)



ホアン・スー・チエ(黄世傑) "Eye Series" 2010
釜山ビエンナーレ ©Huang Shih Chieh

演題：ゴッホの見た日本
※2階講堂、無料、定員180名(約2時間)

○解説会

日時：3月20日(日)午後2時～
講師：深谷克典(名古屋市美術館学芸課長)
演題：アルルのファン・ゴッホ
※2階講堂、無料、定員180名(約2時間)

○映画上映会

(1)「There Is No Blue Without Yellow And Orange ゴッホの足跡をたどるヨーロッパの旅と日本の印象」
フィンセント・ファン・デ・ワインガルト監督
ドキュメンタリー映画(2010年、約70分)
日時：2月27日(日)午前10時～/午後2時～
(2)アラン・レネ監督映画
「ゴッホ」(1948年、アカデミー賞短編映画賞)/「ゴーギャン」(1950年)(約18分/約13分)
日時：[2月]25日(金)・[3月]4、11、18日(金)
午後5:30分～/6時30分～
※2階講堂、無料、定員180名

■常設企画展「ぶろだくしょん我S」

会期：2010年12月4日(土)～2011年2月6日(日)
場所：常設展示室3

■ボジション2011常設企画展「米山和子展」

名古屋市美術館がお贈りする、この地方のアーティストを紹介する企画の第一弾。和紙や米など身近な素材を用いる米山和子の清浄な神秘性を宿した世界をお楽しみください。
会期：2011年2月19日(土)～年4月10日(日)
場所：常設展示室3

■コレクション解析学2010ー2011

○第4回 1月30日(日) 午後2時～
講師：原沢暁子(名古屋市美術館学芸員)
作品：ジョナサン・ボロフスキー
《ハンマリングマン》1982年
演題：“Everything is connected.
(すべてのものごとは繋がっている)”

※当館ホームページ(<http://www.art-museum.city.nagoya.jp/>)を、ご覧ください。
美術館の定休日は月曜(祝休日の場合は翌日)(A)